

# 集団で行うライブ英語音読リスニングと独りで行う オンライン英語リスニングの比較

中島 浩二  
Meredith Stephens

## Abstract

*Previous studies have indicated that many students prefer listening to a live reading of English by a teacher, to listening to an audio-recording of a story. This study explores an additional facet of this topic, by probing whether students prefer listening in a group to listening to a recording in solitary.*

*This study explores the responses of a class of twenty one Engineering students participating in a Communicative English class. The majority of students preferred listening in a group, but a sizable minority preferred listening in solitude. The preferences for group work that the students specified highlight the benefits of collaboration with peers. The students' responses suggest that the practice of solitary listening to audio-recordings of English language stories may be usefully supplemented with listening as a member of a group.*

## Key Words:

listening to a live reading in class, listening to a recording in solitary

## 1. はじめに

コンピュータ援用言語学習(CALL)の利用が容易になり、独りでおこなうオンライン学習という英語学習形態が近年ますます盛んになってきている。しかしながら、学生たちがオンライン学習にあまり取り組みたがらない様子も時に見受けられる。それは、学生たちが、機械から発せられる音声を聞くのより、時間的にも

空間的にも近いところにいる実際の人間から習いたがっているということを示唆しているのではないだろうか。小中高や大学でおこなわれる言語学習においてますます CALL の役割が重要になってきているからこそ、今この問題に取り組むことが重要であると考え。本研究では、独りでおこなうオンラインのオーディオブックを使った英語学習と、実際の教師がライブで話を読んでおこなう英語リスニングのどちらを好むかについて学生たちの視点を中心に考察していく。

## 2. 先行研究

まず最初に、教師によるライブ音読がオーディオ録音とどのように異なるのか説明しておく必要があるだろう。言語によるコミュニケーションが手振り身振りによる非言語コミュニケーション (nonverbal communication) とは別のものであると仮定するのは容易に受け入れられるだろう。しかし、Finnegan が述べたように「我々は恒常的に同時にいくつもの感覚的様式に頼っている (筆者訳)」(Finnegan, 2002, p. 224) ということも忘れてはならない。これまでの千年以上もの間、実際の生の人間同士のコミュニケーションが当たり前で自然なことであり、肉体から離れた音声を配信することが可能になったのは 19 世紀後半にオーディオ録音技術が発明されて以降というわずかな期間のことなのだから。

教師によるライブ音読とオーディオ録音という二つの配信様式の違いにはもう一つ別の側面があり、それは一貫性(consistency)の違いである。オーディオ録音は何度繰り返し再生しても全く同一の音声が流れるというという意味で一貫性がある。それに対して、教師によるライブ音読の場合は、読むたびに揺れが生じ、繰り返し全く同じ音声を学生に届けることができないという意味で一貫性に欠ける。Finnegan (2002)は Limba 語 (西アフリカのシエラレオネの一部族が使う言語) に関する人類学的研究の中で、ライブ音読の場合は「言葉の伝え方(delivery)のタイミング、発音の連続(grouping)と区切り(separation)、発話の速度(speed)、無音(silence)、声の大きさ(volume)、鋭さ(incisiveness)や音調(tone)および聴覚的特質(auditory characterisation)などの展開(deployment) (筆者訳)」(p. 227)に様々なバリエーションが生じる可能性がある、我々に注意を促している。こういった特性は、英語のストーリーを聞き手に対しておこなう際にも同様に起こりうるものであると我々は考えている。後に、Finnegan (2015)は「聴覚的側面にだけ焦点を当てる場合でさえ、我々はイントネーション、テンポ、方言、リズム、声の大きさ、声質、強調などほとんど無限に近い喋り方や歌い方について考慮する必要がある (筆者訳)」(p. 77)との説明をおこなっている。ライブ音読を聴くグループ側の性質もこういった変数に影響を与えるだろう。教師は音読する際、聞き手が発する言語的あるいは非言語的フィードバックをたよりに、聞き手とアイコンタクトをおこな

い、声の大きさ、声の調子や速さを調整する。授業での双方向性という特性によって、一方向的なオーディオ録音では不可能な、声の届け方に様々なバリエーションが必然的に生じてくる。

ライブ音読とオーディオ録音には、感情的関わり(emotional engagement)というもう一つ別の相違がある。ライブの双方向的関わりは、オンラインでの学習とは違った感情状態(affective state)を誘発する可能性がある。Schumann (1997)は「感情は、全てではないにしろ、大半の認識の土台である(筆者訳)」(p. xv)と主張し、さらに第二言語習得の成功につながる次のような議論に発展させている。「第二言語習得(SLA)が安定的に成功しないのは、それが感情によって駆動される(emotionally driven)からである(筆者訳)」(p. xv)と。クラスの学生たちと教師との関係およびクラスを構成する学生どうしの相互の関係が、教材テキスト、さらには学習との感情的関わりのレベルに強い影響を与える可能性があるのだ。

Van Manen (2015)は、すでに読む力のある低年齢の子供たちに対して、他人との会話に参加させることより独りで読書させることに時間を割かせることが有害な影響を与えてしまう可能性について憂慮している。彼は、会話をすることによって習得する能力、例えば「発話の順序交代(turn-taking)、議論(argument)、会話における関係性(conversational relations)、表現性(expressivity)(筆者訳)」(p. 48)などを重要なスキルであるとし、それは独りでする読書では身につかないスキルであると考察している。議論の余地はあるかもしれないが、Van Manenの主張は第二言語学習者たちにも当てはめることができるのではないだろうか。人と人とのライブの相互作用から学ぶスキルが、独りで読むことによって犠牲にされてはならないだろう。

### 3. 方法

必修科目の「発信型英語(Communicative English)」の授業を受講した工学部の学生21名に対して、授業中に英語ネイティブの教師がライブ音読するのをリスニングするのと、独りでオーディオブックをリスニングするのと、どちらの方を好むか尋ねる無記名アンケートをおこなった。アンケートをおこなった時点で、学生たちは1セメスターの授業を終えており、その授業の中で、教師によるライブ音読(週1回の授業で一つのテキストを3度教師が音読)をクラス(集団)でリスニングし、学生同士のペアでディスカッションをおこなった。また、授業外の課題として独りでオンラインのオーディオブックのリーディングおよびリスニングをおこなった。学生たちが、ライブ音読とオーディオブックによる学習それぞれをする中で、英語テキストの理解に対してどのような考えを抱いたかについては、すでに報告した。(Stephens, 2017) 本研究では、ライブ音読をグループで聞くとい

う側面とオーディオ録音を独りで聞くという側面との比較に焦点を当てる。両方のモードとも、ただ英文を聴きっぱなしというのではなく、理解が為されたか評価もおこなった。前者では、ライブ音読中に出てくる様々な単語（表現）10ヶ所の同義語（表現）に言い換えるという課題を与え、後者では、内容理解問題に答える課題を与えた。

アンケートの質問文はあらかじめ英語を日本語に翻訳したものを用い、学生たちには英語と日本語のどちらで回答しても良いと指示した。結果としては、全ての学生が日本語で回答した。日本語の回答は、著者の一人が英語に翻訳し、共著者間で情報を共有した。

#### 4. 結果と考察

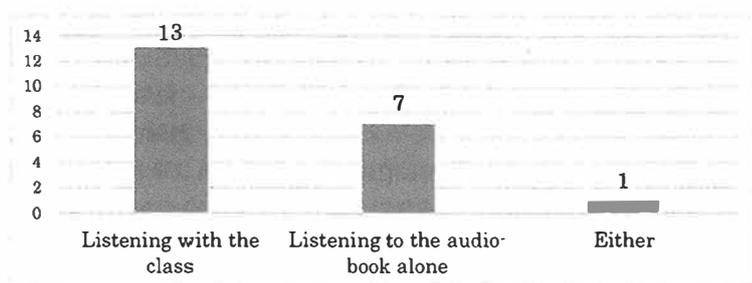


図1. 工学部学生のクラスで行うライブ音読リスニングと独りで行うオーディオブックリスニングに対する好み

クラス内で行うライブ音読リスニングの方を好んだ学生たちは、以下のような理由を挙げた。

- ・相談できるから。(2名)
- ・ライバルがいた方がいい。
- ・(他の学生たちと)勝負しているから。
- ・自分とは違う訳を聞くことで考え方の幅が広がる。
- ・そんなに英語力がないので質問できる人がいた方がいいから。
- ・分からない意味をすぐに聞けるから。(2名)
- ・分からなかった単語や内容を相談できるため。
- ・一人だと集中力が切れやすい。
- ・自分一人だと集中しにくい。
- ・より実践的。

- ・ オーディオブックは家で聴くことができるから。

独りでオーディオブックを聞く方を好むと回答した学生の挙げた理由には以下のようなものがあった。

- ・ 自分一人の都合で調節できるから。
- ・ 静かなところで聞けてリスニングに集中できるからである。
- ・ より集中できる。
- ・ 集中できるから。(2名)
- ・ 雑音がない。好きなタイミングで止めたりできる。音量調節しやすい。
- ・ 雑音がなく、自分が聞き取れなかった所を後で聞くことができるから。

どちらを好むわけでもないと回答した学生の挙げた理由は、

- ・ 差異を感じない。

大半の学生(21名中13名、62%)が授業クラスで教師の音読をリスニングする方を好んだが、少数派(21名中7名、33%)とはいえ相当数の学生が独りであるオンラインのリスニングの方を好むと回答したのも事実である。その理由は個人差に帰されるべきものなのかもしれない。というのは、ある学生たちはクラス(集団)でリスニングの方が集中しやすいと回答した一方で、ある学生たちは独りでオーディオブックを聞く方が集中しやすいと回答しているからである。したがって、集団でリスニングをするか独りでリスニングをするかの違いが集中のしやすさの度合いを決めているという問題なのではなく、学生個々人がそれぞれどのような状況下で集中しやすいかという問題なのである。個人差という決定的因子があるゆえに、リスニングはいつでも集団という文脈で行われる方が良いなどとは言えない。明らかに、個人差をうまく吸収するためには、思慮深く賢明に集団と個人の両文脈を混ぜ合わせる必要があると言えるだろう。

集団で音読リスニングをする方を好むと回答した学生たちの挙げた理由は多岐にわたる。ある学生たちは、リスニングして自分が理解した内容について議論できるパートナーのサポートがあることを好む一方で、他の学生たちは仲間たちと競い合う競争性に価値を見出している。ここでもまた、集団内で作業をおこなう方を好む理由の多様性には個人差が大きく関与しているようだ。グループワークに対して、共同作業性に価値をおく学生と競争性に価値を見いだす学生の集団が異なるからだ。これが、外向性や内向性といった性格因子に由来するものかどうかは、更に研究をすすめていく価値のある問題だろう。

グループでのリスニングが好ましいと答えた学生たちは、理解の過程で教師や

他の学生たちとの仲介が与える影響ゆえにそう答えたのではないだろうか。Block(2003)や Swain 他 (2011)が、scaffolding (足場作り) の概念について説明している。Scaffolding とは、能力の高いもの (英語の理解力が高い学生あるいは教師) が初心者 (英語の理解力が低い学生) に課題解決に必要な足場となる手がかりや援助を与えるということである。教師や同輩が音読されたテキストの理解を手助けする scaffolding は、集団による学習でしか行えない。教室で教師がライブ音読するというケースでは、何度か音読されたテキストの内容を理解するための援助を仲間から受ける機会がある。3 回の音読が教師によって行われ、一回の音読が終わるたびにペアを組んだ学生同士で内容について話し合うように指示されたので、計 3 回の peer scaffolding の機会があったことになる。また、3 度のライブ音読の後には教師にテキストの言い回しについて質問するという教師による scaffolding の機会も設けた。

独りでオーディオ録音をリスニングすることの方が好ましいとした学生の多くが、この学習法の方が集中力がより増すと回答していた。自宅でオーディオ録音を聴く場合は、背景雑音(background noise)を最小限にできるということが理由の一つとなるだろう。時に車の往来や建設工事の音が外から教室に入ってくる。実際の自然な会話では雑音の無い環境はまずありえないので、教室やテスト中に背景雑音を取り除くことは理論的には可能だとしても、そうすることが必ずしも自然なことであるとは言えない。背景雑音があると集中しにくいというのは確かにその通りだろうが、そういう環境下で英語を聞くことが、騒音のある環境で英語を理解するという力を伸ばすことに繋がる可能性もある。独りでオーディオ録音を聴くことの利点は、これも現実の自然な会話の中では必ずしもありえないことではあるが、自分にとって都合の良い音量 (あるいは音質) に調節できるということである。今は技術によって簡単に音を調節可能な時代になってきているが、そういったことは現実の自然な会話の中では話し手が明瞭に説明しようと努力する場合にのみ可能となることなのである。

## 5. 結論

テキストの教師によるライブ音読を他の学生と共有する空間内で聞くという場や機会が今のところまだ残されている。また、多くの学生たちがグループでリスニングをする活動に価値を見出している。それは、双方向性や競争的特性、そして、少なくともある程度の比率の学生たちにとってはグループワークが集中力を高めてくれる所以である。これは、CALL を続けるべきではないと我々が主張しているということではない。独りでオンライン学習をすることは、例えば反転学習(flipped learning)などではクラス内でディスカッションをするための土台作り

としても役立ち得る。Tokuhaman-Espinosa (2014)は次のように推奨している。「多様なメソッドを使って何かを学ぶとき、我々はある同一の情報を僅かばかり異なった神経経路で我々の脳に届けているのである(筆者訳)」(p. 128)と。つまり、それは次のことを示唆している。伝統的なやり方でストーリーを教師がライブで音読して学生たちに聞かせること、そしてクラス内で人と人が交流することによって生まれる交互作用、そうしたものが効率や予算的制約のためにコンピュータを使ったオンラインリスニングを支持することによって失われてはならないのだということ。

#### 参考文献

- Block, D. (2003). *The social turn in second language acquisition*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Finnegan, R. (2002). *Communicating: The multiple modes of human interconnection*. London: Routledge.
- Finnegan, R. (2015). *Where is language? An anthropologist's questions on language, literature and performance*. London: Bloomsbury Academic.
- Schumann, J. (1997). *The neurobiology of affect in language*. Malden, MA: Blackwell Publishers, Inc.
- Stephens, M. (2017). Can students' perspectives inform reading and listening pedagogy? *The Journal of Asia TEFL*, 14 (1), 171-178.
- Swain, M., Kinnear, P. & Steinman, L. (2011). *Sociocultural theory in second language education: An introduction through narratives*. Bristol: Multilingual Matters.
- Tokuhaman-Espinosa, T. (2014). *Making classrooms better: 50 applications of mind, brain and education science*. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
- Van Manen, M. (2015). *Pedagogical tact*. Abingdon, Oxon: Routledge.